「言語相対説」再考

伊藤克敏

和辻哲郎は名著『風土』の中で人間と風土の間柄は「共同体の形成の仕方、意識の仕方、したがって言語の作り方、更に生産の仕方や、家屋の作り方等々において現れてくる。」(13頁)と述べている。このように、自然と人間との関係で文化型を規定する考え方は文化人類学者のコンドン(J.Condon)や石田英一郎等にも見られる。

言語の実質(content)を成す語彙、成句、メタファー等は社会、文化的な面を反映しており、言語間の相違は著しく、それらが各言語の話者に特有の思考形式を与えているものと思われる(Lakoff, 1989)。認知意味論、神経言語学、民族心理学、文化人類学等の観点から考察してみたい。また、子供がどのようにして民族特有の思考型式を身に付けていくのかについても調べてみたい。